

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 25 日現在

機関番号：36301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25285066

研究課題名(和文) 経済学方法論にみる社会科学の多面的構造

研究課題名(英文) On Economic Methodologies -- Multiple dimension of Social Science

研究代表者

松井 名津 (Matsui, Natsu)

松山大学・経済学部・教授

研究者番号：10320110

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、経済学方法論に関する研究成果(科研費基盤研究(B)21133047)より、経済学方法論の総体を捉えるには、視野を経済学に限定するのでは十分でなく、歴史はもとより、哲学、倫理学、社会学、自然科学等へと広げることが必要であると認識した。そこでその目的を達成するために作業仮説として1)哲学的2)規範的3)社会学的4)自然科学的の4つの次元を設定し、各次元との関連において経済学がどのような発展を遂げたのかを研究することを目指した。実際に研究を続ける中で、最終的に4次元を1)哲学的2)自然科学的3)社会的の三つに組み直すことが有効であることに合意し、その研究成果を書籍として出版する予定である。

研究成果の概要(英文)：Our research group had studied the history of economic methodology in Britain with the aid of JSPS's grant and published a book on that theme. But in the process of that study, we found it necessary to explore other disciplines in order to understand the whole facets of economic methodology. More specifically, we thought we should take into consideration the related disciplines to economic methodology such as philosophy, ethics, natural sciences, etc.

On such an understanding as ours, we worked out this time, i.e. philosophical, moral, sociological and scientific ones, and attempted to investigate into how economic methodology had developed in the history of economics in connection with these dimensions. Although eventually we came to focus on not four, but three dimensions, we intend to publish a book on this scheme.

研究分野：J.S.ミルの社会科学論

キーワード：経済学方法論 知性史 社会科学と周辺科学

1. 研究開始当初の背景

経済学方法論は、社会科学の中でも特に他の諸学問分野との越境がしばしば必要とされるという特殊性を持つ。例えば代表的な経済学方法論に関する研究書が Beyond Rhetoric and Realism in Economics (by T. Boylan and P. O’Gorman, 1995), Reflections without Rules (by D. Wade Hands, 2001) というタイトルを有することからも、その特殊性を窺うことができる。それゆえ経済学方法論の展開をより明確にし、その多様性及び多面性を整理するためには、歴史、哲学、論理学、科学哲学、自然科学及び倫理学をはじめとする他の領域の発展や成果を踏まえる必要がある。

本研究ではこうした経済学方法論の多元性や多様性を探求するために、個人研究ではなく研究組織として共通の問題意識を持ち、同一のフレームワークを持って、研究に取り組む必要があると考えた。

2. 研究の目的

平成 21～23 年度科学研究費 基盤研究 (B)課題番号 2133047 イギリス経験論と経済学方法論－歴史的・理論的展開における研究成果に基づき、経済学方法論を中心としながら、社会科学の方法論という論理的課題が、哲学的認識、規範的意識、自然科学的手法、社会制度や慣習等との相互影響関係を、研究の仮説的フレームワーク (4 次元区分) によって明確化し、経済学方法論の多元性や多様性の様相を明らかにすることが本研究の目的である。

仮説的フレームワークとそれぞれの研究対象と研究分担者を表としてまとめたものが下図である。

哲学的次元	松井名津：経験と事実 佐々木憲介：因果性と相互依存性 モデルと実在：原谷直樹
規範論的次元	只腰親和：経済学と倫理学 中澤信彦：経済学方法論と経済政策論
自然科学的次元	上宮智之：経済学と数学および統計学 江頭進：構成論的アプローチ
社会学的次元	久保真：経済学の制度化過程 廣瀬弘毅：ケインズ後の経済学界

3. 研究の方法

本研究は研究グループメンバー各自の研究とその相互批判・検討を中心として行う。が、それだけでは閉鎖的な議論になる恐れがある。そこで、初年度から積極的に国内外の学界において個別研究を発表する中で、我々の研究計画や方向性を発表した。また年 3 回のペースで研究会を開催し、各メンバーがその時点での研究内容を報告。また研究会には必ず他の研究者を招聘して新たな知見を得るとともに、それぞれが所属する学会のメーリングリスト等を通じて研究会の開催を事前に告知し、多様な研究者の参加を促した。

また研究グループメンバーが地理的に散在していることから、インターネットでのファイル共有システムを使用して、研究会前後でのレジメやディスカッション記録の保存、議論の継続、連絡の徹底をはかった。

4. 研究成果

初年度

研究組織の共通認識の確認及び個々の研究対象に対する仮説的フレームワークの検証と深化を目的として年 3 回の公開研究会を実施した。特に第 1 回目では研究組織のメンバーである佐々木氏の著作を書評する形式で、各自の仮説的フレームワーク理解のすり合わせを行った。第 2 回目では音無氏よりロールズにおけるカント的方法、太子堂氏による行動経済学における政策論が報告され、方法論において設定した仮説的フレームワークの認知的哲学的次元が、他の社会科学にも適用可能であることを検証した。また政策とモデルの関係性に関し、経済学における認知的あるいは哲学的前提との関連性の有無が課題となった。第 3 回研究会では個別報告を中心として、政策論を具現した時論的論稿と理論を支える方法論との関係性をどの次元で考察すべきかが議論となった。

また第 2 回、第 3 回と研究組織以外の研究者が連続して出席し、それぞれの研究対象と仮説的フレームワークの適用可能性が、検討された。

二年度

当該年度も研究組織を中心とする公開研究会を 3 回実施した。また連続して出席していた松本哲人氏、石田教子氏より仮説的フレームワークを自身の研究対象に取り入れて、研究活動を行いたいとの申し出があった。これにより仮説的フレームワークの各次元とその内容に関する再検討を行うことが継続的課題となった。第 2 回研究会では James E. Alvey 氏を招聘し、経済学方法論と規範的あるいは哲学的次元に関する報告とディスカッションを行うとともに、当該時点での各メンバーの研究内容を報告し、Alvey 氏からのコメント及びディスカッションを行った。

なお、この年度に研究組織から中澤が HESTA での報告を行ったほか、久保、上宮

が海外学会誌に投稿した（詳細に関しては 5. 主な発表論文等）。

最終年度

年 3 回公開研究会において、二年度より課題となっていた仮説的フレームワークの再検討を行った。本年度研究会には、佐藤方宣氏（関西大学）池田幸弘氏（慶應大学）が参加し、各報告にコメントをいただいた。

なお、最終年度の成果として、規範的次元の設定を再検証し、最終的に次のようなフレームワークと分析による研究を実施、その成果を書物として出版することとなった。

哲学的次元

佐々木憲介：因果関係と相互依存関係
中澤信彦：経済政策の目的と手段
原谷直樹：存在論と経済学方法論

自然科学的次元

上宮智之：経済学への数学的方法導入の正当化
松井名津：経済学方法論と生物学的心理学
松本哲人：科学と宗教の調和
江頭進：方法論史から見る新しい経済学

社会的次元

久保真：経済学と統計学
只腰親和：分業論と方法論
石田教子：人類学的視角と経済学の人間モデル
廣瀬弘毅：ケインズ後の方法論的転回

当初の仮説では規範的次元を設定していた。この次元は政策論に含まれた「規範的社会」意識を剔抉するために設定されたものである。しかし相互に研究結果を検討する中で、規範的社会を希求する姿勢は、単に現実的な政策論に反映されているだけでなく、研究対象である「経済学者」が理論構築の前提とする人間像・分析モデル・分析方法の選択等に及ぶことが判明した。

したがって、規範的次元設定するのではなく、それぞれの次元において規範的社会像や規範的意識がどのように展開されたのかをより明確にすることとした。

また各次元への研究対象者の配置も、研究の深化とともに変化したことも、成果の一つである。

今後は、松本哲人、石田教子の両氏を加えた研究組織で、経済学におけるディシプリンとは何か、経済学は何を対象とする科学であるのか（あるいはあるべきなのか）といった現代経済学の根底に通じる課題を探究する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

- (1)Shin, Kubo, Political Economy at Mid-Nineteenth-Century Cambridge: Reform, Free Trade and the Figure of Ricardo, *The European Journal of the History Of Economic Thought*, 22(5), 2015, 872-895, (査読有), DOI 10.1080/09672567.2015.1068822
- (2)Naoki Haraya, Mark Blaug(1927-2011), 『経済学史研究』, 56,2, 2014 年, 122-124, (査読有)
- (3)久保真 「D.ステュアートの経済学講義ーコンドルセとマルサスを超えて」, 『経済学論究』 68, 3, 2014 年, 125-147, (査読有)
- (4)Shin, Kubo, D.Stewart and J.R.McCulloch : Economic Methodology and the Making of Orthodoxy, *Cambridge Journal of Economics*, 38,4, 2014, 925-943, (査読有)
- (5)廣瀬弘毅, マクロ経済学モデルと経済像, 福井県立大学経済経営研究, 30 号, 2014 年, 51-64, (査読有)
- (6)Susumu Egashira and Takahashi T. , Hayek's Sensory Order, Gestalt Neuroeconomics, and Quantum Psychophysics, *Hayek and Behavioral Economics*, 2013 年, 177-196, (査読有)
- (7)上宮智之, W.S.ジェボンズの古典派的側面ージェボンズ経済学の整合性問題, マルサス学会年報, 22 号, 2013 年, 22-51, (査読有)

〔学会発表〕（計 13 件）

- (1)原谷直樹, 存在論はなぜ経済学の方法論の問題になるのか, 東京経済研究センター定例研究会, 2015 年 7 月 15 日, 早稲田大学
- (2)廣瀬弘毅, ケインズ経済学の政治的背景, 日本臨床政治学会, 2015 年 9 月 5 日, 名古屋大学
- (3)只腰親和, スコットランド道徳哲学の方法論的遺産ーデュガルド・スチュアートの経済学方法論, 日本イギリス哲学会第 39 回研究大会, 2015 年 3 月 28 日, 甲南大学
- (4)原谷直樹, ハイエクの社会科学方法論, 経済学史学会第 78 回全国大会, 2014 年 5 月 24 日, 立教大学
- (5)久保真, 中澤信彦, 野原慎二, 経済学とフランス革命ーコンドルセ・マルサス・D. ステュアートー, 経済学史学会第 78 回全国大会, 2014 年 5 月 24 日, 立教大学
- (6)Nobuhiko Nakazawa, Reviewing the Development of Malthus's Reformist Ideas from 1803 to 1806, with Special Reference to His Criticism of Paine's Rights of Man, 2016 年 3 月 18 日, Population, Poverty, and Welfare in the History of Economic Thought: An International Comparison, Ryukoku University, Japan
- (7)Nobuhiko Nakazawa, A Note on the Possible Implications of Keynes's Reading of Malthus's High Price of Provisions, 47th Annual UK

History of Economic Thought Conference In conjunction with The History of Economic Thought Society, 2015年9月2日, Manchester Metropolitan University, U.K

(8)Nobuhiko Nakazawa, Malthus's Criticism of Paine's Rights of Man, The 13th Conference of the International Society for Utilitarian Studies, 2014年8月21日, Yokohama National University, Japan

(9)Nobuhiko Nakazawa, "The Actual fact" in "the Real World": A Re-examination of Keynes's Discussion of Malthus's High Price of Provisions, 27th Conference of the History of Economic Thought Society of Australia, 2014年7月11日, The University of Auckland, Australia

(10)Susumu Egashira, Hayek and Evolution: Discussion with Japanese biologist, Kinji Imanishi, 18th Annual Conference of European Society of History Of Economic Thought, 2014年5月31日, Lausanne University, Swiss

(11)Shin, Kubo, Becoming True Heir to Adam Smith: Dugald Stewart and his Non-Utopian and Non-Gloomy Version of Political Economy, The 41th Annual Conference of History of Economic Society, 2014年6月21日, L'Université du Québec à Montréal (UQAM), Canada

(12)Shin, Kubo, The Figure of Ricardo in Mid-Century Cambridge, History of Economics Society, 2013年6月21日, University of British Columbia, Canada

(13)Nakazawa Nobuhiko, Malthus's Criticism of Paine's Rights of Man, 26th Conference of the History of Economic Thought Society of Australia, 2013年7月4日, Perth, Australia

〔図書〕(計 7 件)

(1)佐藤光, 中澤信彦編 『保守的自由主義の可能性ー知性史からのアプローチ』, 2015年, ナカニシヤ出版, 288

(2)中澤信彦著 「反革命思想と経済学ーマルサス『食糧高価論』に関するー考察ー」坂本達哉・長尾伸一編 『徳・商業・文明社会』, 2015年, 京都大学出版会, 261-282(412)

(3)松井名津著 「4-4心理 損得感情に感情は入っていないのか」橋本努編 『現代思想』, 2014年, 勁草書房, 497-527(600)

(4)Susumu Egashira (ed.) Globalism and Regional Economy, 2013, Macmillan, 207

(5)中澤信彦著 「マルサスのペイン批判ー啓蒙の野蛮化との戦い」田中秀夫(編) 『野蛮と啓蒙: 経済思想史からの接近』, 2014年, 京都大学学術出版会, 593-624 (694)

(6)中澤信彦著 「ハイエクの保守主義ーハイエクはパークをどのように読んだのか」桂木隆夫編 『ハイエクを読む』, 2014年, ナカニシヤ出版, 35-61 (369)

(7)松井名津著 「J.S.ミルの経済学と人間的成長ー教育と労働者の自律をめぐるー」柳田芳伸, 近藤真司, 諸泉俊介(編) 『マルサス・ミ

ル・マーシャルー人間と富との経済学』, 2013年, 昭和堂, 103-128 (265)

6. 研究組織

(1)研究代表者

松井名津 (Matsui Natsu)
松山大学 経済学部 教授
研究者番号: 10320110

(2)研究分担者

中澤信彦 (Nakazawa Nobuhiko)
関西大学 経済学部 教授
研究者番号: 40309208

(3)研究分担者

久保 真 (Kubo Shin)
関西学院大学 経済学部 教授
研究者番号: 30276399

(4)研究分担者

佐々木憲介 (Sasaki Kensuke)
北海道大学 人文科学研究科 (研究院) 教授
研究者番号: 50178646

(5)研究分担者

江頭 進 (Egashira Susumu)
小樽商科大学 商学部 教授
研究者番号: 8029077

(6)研究分担者

上宮 智之 (Uemiya Tomoyuki)
大阪経済大学 経済学部 准教授
研究者番号: 80580528

(7)研究分担者

只腰 親和 (Tadakoshi Chikakazu)
中央大学 経済学部 教授
研究者番号: 40309208

(8)研究分担者

廣瀬弘毅 (Hirose Kouki)
福井県立大学 経済学部 准教授
研究者番号: 202816157

(9)研究分担者

原谷直樹 (Haraya Naoki)
群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部 講師
研究者番号: 30707138